

教育最前線

連載 6

高松市立紫雲中学校 [自転車交通安全モデル校事業]

関係機関・団体の連携により 中・高生の自転車マナー向上をめざす



1年生を対象とした自転車教室の様相



全校生徒を対象とした交通講話では、ダミー人形を使った自転車事故実験の映像で事故の危険性を伝える

香川県では、自転車を利用した都市づくりに向けて、「環境」・「安全」・「地域活性化」を三本柱に国・県・市及び関係団体が連携して取り組んでいる。

その一例が、高松市の「自転車交通安全モデル校」の取組み。「自転車を利用した香川の新しい都市づくりを進める協議会」の高松地区委員会安全教育部会が行っており、JR高松駅から半径2・5km内の中学校・高校、7校がモデル校に指定されている。

モデル校の1つ、高松市立紫雲中学校では、6月18日に1学年生徒200名を対象とした参加体験型の自転車教室、翌19日に全校生徒を対象に警察官による交通講話が実施された。自転車教室と交通講話は、香川県警察本部交通企画課と同校が企画。自転車教室では、交通企画課と高松北警察署の警察官2名と、香川県交通安全協会教育隊1名が指導を担当した。

ポイント①

参加体験型の自転車教室により自分たちの日頃の自転車走行を見直す

二人乗りや傘差し運転の体験では、スラ

地域特有の交通状況を理解させる

JR高松駅周辺の地域は、歩道の整備が進み、歩道に道路標識などで自転車の通行区分を設けている場所が多い(左写真参照)。そうした、地域の交通環境に合わせて、自転車の通行方法を説明することで、日頃から安全な走行を実践してもらう。



紫雲中学校付近の歩道

説明は、リーフレットを配り具体的に「普通自転車通行指定部分では急がずに徐行。指定された部分を通行してください」「自転車通行可の歩道は、左右どちらの歩道でも通行できます。ただし、歩道は

ポイント②

ローム走行の際にパイロンに接触するなど上手に運転できない生徒が続出。見学の生徒たちを含め、全員が二人乗りや傘差し運転の危険性を理解した。

「二人乗りや傘差し運転は、実際に中学生にも見られる運転です。自分は事故を起こさないとはい込みこのような運転をしてしま

歩行者が絶対優先です」「自転車同士がすれ違う時は、右側に相手自転車を見てください」など、正しい通行ルールの周知をはかる。

ポイント③

中学生には心に残る本音の教育を

「二人乗りはいけないとか、交差点で安全確認が必要などは、中学生くらいになるとなんとなく理解しています。ただ、実際の行動で表すのが難しい」と担当者は考えている。そのため、交通講話で自転車事故

地域や家庭と一緒に交通安全教育を推進

高松市の自転車交通安全モデル校の取組みは、「改正道路交通法の周知徹底」「参加体験型の自転車教室の実施」の他に、「地域ボランティア等と連携した街頭指導の実

実験の映像を見せるなど生徒の記憶に残るような工夫をして、事故の危険性を伝えていく。さらに、「自分が被害者や加害者になるかもしれない。当たり前のことを当たり前にできる人になってほしい」と生徒の本音に訴えかけ、意識の変容を促す。

「先生・保護者を対象とした交通安全講習会」を内容に掲げている。地域や家庭も一体となって、自転車利用マナーの向上と交通事故防止に取り組んでいく体制を築いている。

今回の自転車教室・交通講話について、紫雲中学校教頭は「交通安全の専門家から指導していただいたので、教師の指導とは違った印象で生徒の心に残ったと思います。自分で自分の身を守る、命を大切にするといいことを学べる良い機会だと思えます」と話す。

[自転車教室の指導内容]

1 内輪差の危険を伝える「巻き込み状況の再現」



模擬交差点の角にパイロンを設置し、車両が左折する際にクルマの内輪差により後輪でパイロンを巻き込んでしまう様子を再現。見学の生徒たちに「もしこれが自分たちだったらどうなるだろう?」と問いかけ、内輪差について説明。そして、「後輪に巻き込まれて事故に遭うケースもあります。交差点では、クルマの近くに近寄らないように」と伝えた。

2 安全確認の習慣化をめざす「見通しの悪い交差点の通行」



模擬交差点の横に壁を設置し、見通しを悪くする。「この交差点では、一時停止して安全確認をしてください」と伝えても、停止せずそのまま通行してしまう生徒も見られた。「普段やっていないから今日も忘れてしまう。見たつもりになって首を振るだけで、実際には見えていない人もいます。自分の身を守るためにしっかり止まって安全確認してください」とアドバイス。

3 死角から出てくる歩行者に注意「駐車車両の側方通過」



駐車車両の側方を通過しようとした時に、かげから人が飛び出す。「実際の場面でもクルマのかげから人が出てきたり、ドアが急に開くことがあります。駐車車両の横は速度を落として、よく確認してください」と危険予測の重要性を伝える。

4 雨の日の危険な走行「傘差し運転の体験」



パイロンでスラロームコースをつくり、実際に傘を広げて持ちながら走行する。「前が見えづらい」「パイロンに接触」「足を何度も地面につく」など苦戦する様子が見られる。「大丈夫と思っても、バランスは取りづらく大変危険です」。

5 中学生に見られる危険な走行「二人乗り」



別の生徒を後ろに座らせ、二人乗りでパイロンスラロームコースを走行する。傘差し運転と同様フラフラと走行したり、転倒しそうになる生徒も見られた。「二人乗りでは、バランスがとれず、思った方向に曲がれないことがわかったと思います。転倒しやすく、危ないということを知ってください」と話す。